

未来への道しるべに

片岡仁美

岡山大学病院 総合内科・総合診療科/ダイバーシティ推進センター

コロナ禍による医療の逼迫という報道を見ない日はなく、先が見えない閉塞感のなかで、現場の医師、医療スタッフは目の前の患者さんに向き合っている。本特集が出版される時に状況が少しでも改善されていることを願っている。

「働き方改革どころではない」という方も多くいらっしゃると思う。しかし、コロナ禍における医療の逼迫と働き方改革は、実は密接に関係している。渋谷論文 (p.1216~) で指摘されているように、わが国の医療提供体制の問題点が、急激な医療需要を生み出したコロナ禍によって、一気に顕在化したと言えよう。また、白河論文 (p.1224~) での指摘にもあるように、これまで医療従事者の長時間労働によって何とか支えられていた現場には、人的にも時間的にも余裕がなく、危機が起こった時には対応が難しくなる。

その点から考えると、コロナ禍への現場と国の対応を進めながらも、さらなる危機対応という視点から、働き方改革についても進めなければならないというのが現状であると考える。

私は新医師臨床研修制度導入前の卒業生として旧来型の研修を受け、著しい長時間労働に疑問を持たずに働いてきた世代である一方、10年前から女性医師のキャリア支援を通して「医師の働き方」を考え続けてきた。加えて2017年から厚



生労働省の「医師の働き方改革に関する検討会」の構成員となったことで、さらにこの課題に取り組むこととなった。

そこで痛感したことが「働き方改革は、単に勤務時間短縮を押し付け

られるだけになってしまってはいけない」、ということである。医師自身が患者さんの健康だけでなく、自身の健康を顧みるマインドセットの変化と、労働時間管理をはじめとするシステム改革の双方が必要であり、これらは能動的に行ってこそ、真に意義がある変化となるだろう。

本特集では、[総論] で医師の働き方改革とは何かを正面から掘り下げ、[各論] では議論が深まった応招義務や宿日直許可、自己研鑽などについても最新の情報を整理していただき、働き方改革に関するさまざまなエビデンスも提示いただいた。また、現場で何が必要か、といった実践的な内容や、現場での実際的な取り組みについても非常にリアルな内容をご紹介いただいた。[コラム] では医師の働き方に関連するさまざまな課題や論点を多角的に論じていただいた。素晴らしい先生方にご執筆いただき、どのページも読みごたえのある特集となったことに深く感謝申し上げます。

先が見えない中ではあるが、本特集が少しでも皆様のお役に立ち、未来への道しるべになれば幸いである。



Editorial